

---

# バクが食べた夢

二葉一葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バクが食べた夢

### 【Nコード】

N1643G

### 【作者名】

二葉一葉

### 【あらすじ】

高校生カップルのアオと嶋子ののんびりな日常。そしてふたりを見守ってるのかどうか・・・でもやたらと取り巻いてる人たちの物語。

帰り道、公園で。

沈丁花が、薫る。

「アオー」

「うんー？」

「何描いてるのぉー？」

「嶋子「シマコ」ちゃん」

「下手っぴ」

「・・・」

そうかな？

ボクはまじまじと地面に描いた嶋子ちゃんを見る。

まあるい顔、揃えた前髪、両側の三つ編みにはリボンもつけた。

何が足りないんだらうか？

むむむむむ・・・

首を捻って呻るボク。

ラララララ・・・

キミは、優しい歌を口ずさむ。

「ねー、アオー？」

「・・・うんー？」

「ここに、来てー？」

カンッ・・・、カンッカンッ・・・  
さび付いた手摺り、滑り台のてっぺん。

嶋子ちゃんは身を乗り出して、巨匠アオ先生の絵画をのぞき込む。  
ホッペにふたつ、マルを描いたの、正解。

なのに「全然、似てないよー」って、キミが言うから、ボクはちょっと悲しくなる。  
だつてさ。

「それじゃ、ボクは、嶋子ちゃんじゃない子にキスをしてるってこと？」

滑り台の下。

キミの隣には、ボクがいて。

たくさんハートと、たくさんキスを贈る。

それは、キミだけの特別。

「やだ、ダメ」

「うん。ボクもやだ。だから、あれは嶋子ちゃんだよ」

「でも、アオも似てない」

「・・・」

じゃ、あれは、嶋子ちゃんとボクの・・・ものまねさんってことで。  
ものまねさんを真似て、ボクはそっと、キミにキスをした。

揺れる三つ編み、ひるがえるスカート、舞い上がるハート、ハート、ハート。  
キミは笑って滑り下りた。

沈丁花が、零れた。

おさげ。

嶋子ちゃんの髪の毛は色素が薄い。

ハゲるかもしれないって、キミは泣いたことがあった。  
その時ボクは、ハゲても好きだよって言ったけど、キミはホッペを  
膨らませたんだよね。

「アオー？何笑ってるの？」

夢中になっていた絵本から顔を上げて、嶋子ちゃんは眉を寄せてみ  
せた。

その眉毛も、少し茶色。

「うん。三つ編み、好きだなって思って」

「そうなの？」

「そうみたい」

嶋子ちゃんの髪を2つに三つ編みにすると、シッポみたいになる。  
でも、それは内緒。

きつとしてくれなくなる。ボクはそれが好きなのに。

片方のシッポを撫でるボクを、キミは不思議そうに見上げる。  
パチパチ、パチパチ。

大きな瞳を、瞬き、4回。

あ、その顔は、もじゃ……

「じゃ、アオにもしてあげるっ」  
「ええええ……」

嬉しそうに跳ねて、嶋子ちゃんはボクの後ろに回った。  
「きつとアオも似合うよ」

細い指が、真っ黒でゴワゴワしてるボクの髪を梳いていく。  
キミはボクの知らない歌を口ずさむ。  
ボクのお腹の虫はキュルキュルと鳴く。  
短い歌を4回繰り返し返して5回目の途中、キミは手を止めた。

「出来た。フフ、かわいいー」

かわいいって、ボク、オトコだよ？

「どうー？気に入った？」

小さな手鏡に、映る三つ編みされたボク。

「……ちよつと痛い」

「だって短いんだもん」

キツキツに編まれたボクの髪の毛は、アッチコッチに逃げるように飛び出してる。

手触りも、ザクザクしていいものじゃない。

やっぱりボクは……

「嶋子ちゃんの三つ編みの方がいいよ」  
「えー」

……そんな残念な顔にしても、もうしないよ、三つ編みなんて。

だから今度、髪の毛、切っちゃお。

「ほどいていい？」

「ダメ」

「え……」

「ほどいたら、ゴハン作ってあげない」

えええ、そんな……

朝からキミが仕込んだカレーは、まるで隠れきれないシツポのよう  
にいい香りを漂わせている。

ボクのお腹の虫は楽しみにそれを待っているのに。  
キュルキュル、キュルキュルって。

「作ってあげないよー？」

「……わかった、今日だけ、我慢する」

満足気に頷く、嶋子ちゃんの三つ編みが揺れる。

ボクの三つ編みも揺れればいいのに。

「アオ、お揃いだね？」

ザクザクでチクチクの三つ編みに触れたキミ。

ボクは笑って、頷いた。

## バスストップ。

バスが3本、目の前を走り去っていった。

今日の朝食は、鮭を焼いた。

脂ののった、大きな鮭。

・・・おいしかったなあ。

嶋子ちゃんは何を食べたかな。

いま、ホワイトチョコのスコーンがお気に入りって言ってたっけ。

うん。ボクも、ホワイトチョコ、好き。

シトシト、シトシト、ピチャンツ・・・、シトシト・・・

午後は晴れるんだって。

そしたらこの傘を高く広げて、虹を飛び越えに行ってもいい。

キミは黄色、ボクは水色。

『アオだからアオね。』

そうやって笑う嶋子ちゃんが目に浮かぶ。

飛び越えた先に、七色の傘。

早くキミに会いたいな。

「アツオツ、ちゃーーーーーんっ!」

黄色いレインコート、黄色い長靴。

小さなカノジヨは、大きな水たまりを飛び越える。

「アオちゃんっ、オハヨーッ！」

「おはよう、香子ちゃん。」

キミによく似た、小さなカノジヨ。

まだ降り続けている雨に濡れないように、傘を差す。

黄色い帽子に赤い花。

「ガッコー？」

「うん。香子ちゃんは、幼稚園？」

「うんっ！コーコはよーちえんっ！」

エヘンツて腰に手を当てて、胸を張る。

思わず笑みが零れるけど、ボクもコホンツと咳払いして、胸を張った。

「嶋子ちゃんは、どうしたの？」

・・・あれ？

小さいカノジヨは今度はガクツーと肩を落として、ため息ひとつ。あれあれ？

黄色い帽子から覗く瞳は、キミにそっくりで。

その瞳が語ること。

『いつもいつもいつも・・・！』

「嶋子ちゃんはあー・・・あっ！」

真っ赤なスクールバスが、水を跳ねて、キラキラ、キラキラ。

ボクは小さいカノジヨを抱えて走り出す。

キラキラ、キラキラ、水たまりさえ飛び越えられずに、キラキラ、

追いかける。

「・・・つま、子ちゃんっはあ、てるてるぼーずっ、作ってるうう  
うううううう・・・」

小さい手を振る小さいカノジヨを乗せたバスが走り去る。

ボクは、ふはあつて大きく息を吸い込んで、空を仰いだ。

雲は途切れて、青い空。

嶋子ちゃんに、もうてるてる坊主は必要ないよって、教えてあげな  
くちや。

・・・あれ？傘、は？

あ、バス・・・て・・・い・・・

「アオー！」

水色の傘に黄色のてるてる坊主。

白いセーラー服に黄色と水色の水玉の長靴。

キミは、水たまりを飛び越えるなんてこともしない。

「晴れたから、遊びに行こう」って、ボクの腕を引っ張った。

水色の傘1本、虹を飛び越えて紫陽花の国に。

「うん。行こっか」

4本目のバスは、キミとボクを追い越して、走り去った。

## 夏のはじまり。

くわあああ。って、大きな欠伸。  
ういっしょ。って、背伸びして、その腕が後ろを通った女子に当たる。

ああ、ゴメン。と、片手で謝った。  
もう片っぱの手は、カバンの中。  
取り出したのは、パンパンなビニール袋。

あ。  
チヨココロネ。

「アオ。お前、痩せた？」

セージはよく食べる。

いま食べてるメロンパンで、4個目。

残るはチヨココロネ、1個だけ。

セージは甘甘甘党。

「どーだろう。わからない」

ボクは、セージが顔を顰めるほど嫌いっていう豆乳を飲む。

フツのやつ。味の、ないやつ。

「何か青白い。夏バテ？」

「・・・違うと思うけど」

暑いのは苦手だけど、よく、外で遊ぶし。  
でもやっぱり苦手。

寒いくらいの方がいいな。

マフラー巻いて、手袋して、ニットの帽子を被って。  
ギューッ……て、嶋子ちゃんと抱き合っただ。

きつと、温かい。

「シマちゃんって、期末中だったけ？」

「……うん。でも明日で終わりだから」

いますぐ、会いたい。けど、会えない。

明日、会えるから。

あと1日の我慢。

だけど、ボクの心臓は悶える。

どうしてここにキミがいないんだろう……

「あのね？たかが4日間、会わないくらいでそんな暗くなっどーすんのよっ」

「うおう、シツノ」

ガタンツと椅子が鳴る。

セージの見上げてる先に、威圧的に立ちはだかる女の子。

ドサリ、と机に置かれた重量感のあるお弁当箱。

「びびるだろっ。いきなり近づくなっ」

「びびるよーなこと喋ってたわけー？私には嶋子、嶋子って泣いてるよーに見えたけどー？」

……泣いてないよ。

泣きそうな気分ではあるけど。

シヅノは、セージと似て柔らかく明るい髪の毛をサラリと靡かせて椅子に座る。

重箱を思わせるお弁当箱を広げて、シヅノは一瞬箸を迷わせて、卵焼きを突き刺した。

「今から昼メシ？何してたの、お前」

「誰かさんが異常なほどオチてるお陰で、勘違い女子のみなさんに捕まってたの。・・・はい、あげる」

ああ。と、セージは頷いたけど、ボクにはさっぱりわからない。

突き出された真っ黄色の卵焼きを、一口、食べた。

甘い、甘い、フワフワな卵焼き。

嶋子ちゃんの卵焼きはもつと、しょっぱかった。

・・・早く嶋子ちゃんの卵焼きが食べたいな。

「花柄のシュシュを恥じらいもなくつけてるこの男のどこがいいんだか」

「まったくなあ・・・」

「アオっ！しっかりゴハンくらい食べなさい！嶋子に会う前に倒れるわよっ」

「お前はかーちゃんかい・・・」

「アンタはチヨコ食べ過ぎっ」

もうすぐ、キミと一緒の夏が始まる。

## マウンテン マウンテン

緑萌ゆる、山滴る。

5時間前の、ウサギのとおり道。  
登る、登る、登る。

キミの右手に双眼鏡、左手にはパラソル。

3時間前の、タヌキのとおり道。

下る、下る、下る。

ボクの右手に水筒、頭には麦わら帽子。

1時間前の、蝉の休憩所をとおり越して。

登る、登る、登る、登る。

ボクの左手に黄色い花、キミのホッペは紅く火照る。

太陽は東から西へ。

汗ばんだ体を拭うように、風が吹きぬけた。

「アオ、海っ」

緑がボクらを誘って、広がるのは、蒼い空と碧い海。  
融け合って、ひとつになる。

キミは飛び込んで、沈む。

ボクもキミを追って、沈む。

どこまでもどこまでも沈んでいく。

空気で、窒息する。

「このままでいるのも、いいね」  
「このまま、ふたりでいたいね」

世界に、ボクとキミだけという、錯覚。

海が見たいと言ったのは、ボク。

山に行こうと言ったのは、キミ。

キミとボクに、空が落ちる。

海は遠く、山に溺れた。



背筋が凍った。

塵ほどの慈悲心に救いを求めるべく、ボクは必死に顔を振る。

「あつ、これっ」

救いの神様はキミだった。

凍りついた背中に温かな光が当たったかのよう。

その聖なる光りの声は、襲いかかる悪魔の動きをも止める。

「アオ、見つけたよ？」

「あ、これと同じー」

嶋子ちゃんが広げた図鑑と、ボクが拾った黄色い花。

首をもたらせるほど小さな花がいくつも咲く。

「『クララ』、だって。かわいい名前だねー、コーコ」

「うん、かわいい」

「名前がかわいいだけに、毒草だったりして」

悪魔には全てを闇にする力があるらしい。

そしてキミはその囁きに耳を傾ける。

広がった図鑑が、ぶ厚い魔術書に見えてきた。

嶋子ちゃんは呪文をなぞって、唱えた。

「『初夏の山野や草地に黄色い花を咲かせる草丈1メートルから・  
』」

「1メートルもするもの持って帰る？バカねえ」

「『漢方に使われ、強壮・消炎・健胃薬とされます』・・・お薬な  
んだね」

「ふうん。・・・おとーと想いのおねえ様が作ってさしあげましょ  
う」

「チャコさん、作れるの？」

「任せなさい。こーゆーのは得意なの」

悪魔に唆された、ふたり。

ボクの胃は、健康なんだけどな・・・。

ボクは、ゆっくりと魔術書に視線を落とす。

「『クララの根は、漢方に使われ、強壮・消炎・健胃薬とされます。  
なお葉、茎、種子部分は駆虫薬として使用される毒草です』・・・」

「嶋子ちゃん、クララってスゴイねー」

「この花の部分を煮出せばいいのかなー」

「茎と葉っぱも入れちゃっていいんじゃないの」

「嶋子ちゃんっ！ー！」

ボクは最期、キミの名を呼びたい。

そしてキミの作った毒薬を喜んで飲みほそう。

『クララの成分には脳を麻痺させる作用があります。』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1643g/>

---

バクが食べた夢

2010年10月12日04時39分発行